地域映像アーカイブに関して～「京都ニュース」を中心に

大阪芸術大学　映像学科　教授　太 田 米 男

今回の研究は、1956 年から 1994 年まで、京都市広報局が製作してきた「京都ニュース」の保存と活用という大きなテーマの下で、その現状報告と、各地で行われている地域映像アーカイブ活動を調査し、参考にすることで、「京都ニュース」の映像を如何に活用し、活性化させるかを考察するものである。

まずは、「京都ニュース」の現状報告から始める。京都市が「京都市民憲章」を広げるため、また市政報告を市民に伝えるために、当時映画界が全盛期であったことで、最も効果のある方法として、映画館での上映を行ってきた。その映像は、39 年間にわたる京都市の市政報告の歴史であり、市民生活や景観の移り変わりを動画として記録されている。この膨大な映像資料を次世代に伝えることの意義を訴え、市の「お宝バンク」事業に登録し、京都市歴史資料館に保管されている 35mm 原版を調査し、「京都ニュース」の保存と活用というプロジェクトを京都市と共に行ってきた。京都市がフィルム貯蔵庫を所有していないために、各所に放置状態となったフィルム素材を国立映画アーカイブ（以下、NFAJ と表記)に寄贈することで、「京都ニュース」のフィルムを保存するという点では、市の方針が決まった。ただ、NFAJ に寄贈すると決まったものの、デジタル化によるフィルム放出が進み、各団体や行政機関にあった多くの映画フィルムが、NFAJ に集中的に集まり、寄贈しても調査だけで約 10 年近くはかかりそうだということで、市が独自で、調査を行うことを指導され、指定された専門ラボでの作業にとりかかることになった。そのフィルムは約 800 本を数え、「京都ニュース」だけでなく、これまで京都市が製作してきたすべての映像が含まれていた。その結果、経年劣化が進み、早急に適切な保管庫に入れる必要が迫られていることも分かったが、大量にあるだけに調査ははかどっていない。ただ、活用という点では、国有財産となれば、今後の使用も難しくなることが予想され、早急なデジタル化が求められるのだが、京都市としてはその費用を捻出できず、断念せざるを得なった。そこで、当プロジェクトでは、立命館大学アートリサーチセンター（ARC)に保管されている 16 ㎜フィルムを、簡易テレシネという方法でデジタル化を進めることにした。映画館で上映した 35mm ではないので画質的には覚束ないが、内容を把握する上では、同じ原版からのプリントであり、ARC での 16 ㎜フィルムで進めることになった。「京都ニュース」全 244 巻中、あと 7 巻の未作業を残し、他のすべてのデータ化を終えた。その映像を順次静止画としてホームページに公開し、各巻、内容が分かるように紹介している。
http://toyfilm-museum.jp/kyotonews/
ARC の呼びかけで、研究者の参加もあり、今年度の修復作業には、同志社女子大学の研究助成も得られることになった。これまで未作業のフィルムの修復復元で、欠落していた 7 巻中 5 巻を選び、あと 2 巻を残すのみとなったが、これまでの調査の結果、「京都ニュース」の素材を使って、新たな作品を作成しているため、元素材を使いまわしされたものと分かってきた。そのため、「京都ニュース」の原版としては、存在せず、欠落した巻は散逸したものと判断せざるを得ない。また、今回の作業の中でも、うち 3 巻は、画ネガはあったものの音ネガが見つからず、今後の課題として残すことになった。以上が現状の報告である。

国唯一のフィルム・アーカイブである NFAJ は、一昨年より東京国立近代美術館フィルムセンターから 6 番目の国立美術館として独立、フィルムだけでなく、またボーン・デジタル作品の保管にも努めることになった。その状況については先述した通りである。今回のテーマである NFAJ 以外の地方での活用はどうなっているのか。国際フィルムアーカイブ連盟（FIAF)の正式会員として評価されているのは、福岡市総合図書館である。アジア映画を中心に FIAF が条件としているアーカイブ機関として地方自治体の施設では唯一認められている。京都には京都文化博物館もあるが、京都が「映画のまち」であったという点で、京都で作られた映画作品を集めてきたが、大半が映画会社が権利を持つフィルム・ライブラリーを目的としている。市と府という関係もあり、「京都ニュース」の連携は考えられない。ここにも行政の縦割り構造がある。アーカイブを推進する京都府は、京都大学と太秦にある東映京都撮影所内になる映画文化館の資料調査に努めている。映画フィルムはなく、スチール写真やポスターなど非フィルム素材の調査に入っている。地域のアーカイブとしては、川崎市市民ミュージアムがあるが、「川崎市映像アーカイブ」は、ネットでの公開を進め、「京都ニュース」の公開方法を示唆する大きな参考例になっている。ただ、昨年の台風で、地下の保存庫が水没し、たいへんな被害を受けた。フィルムのみならず、紙資料など地下に保存されたために、たいへんな損失を受けた。同じ地下の保管庫を持つ NFAJ 相模原分館も神奈川県にあり、安全な筈の地下倉庫が、水害によって被害を受けたことで、保存庫の在り方を再考する機会を与えられたことになった。

大阪には、「国立民族学博物館（みんぱく)」があるが、広く世界の人類学的な資料類と共に、それらを記録した多くのフィルム映像があり、独自の観点から、保存庫の湿度や温度管理に関して実践している。広島市にある「広島市映像文化ライブラリー」は、ライブラリーと名乗っているように、平和教育を主体にした上映活動を主に行っている。民間での最大のフィルム・アーカイブは、やはり神戸映画資料館で、文化庁の助成を得て、所蔵フィルムのデータベース化が進められている。しかし、最大の難問は、適温湿のフィルム収蔵庫を持っていないことである。

沖縄でのアーカイブは、一般市民が写した 8mm などの映像を集め、戦後沖縄史を位置付けている。新潟大学や東京都北区、台東区、大阪平野区などの住民による映像アーカイブの取り組みは、次第に広がりつつある。毎年開催されている「ホームムービーの日」には、失われつつある 8mm 映像を集め、その保存を呼びかける運動でもある。個人が記録した映像ではあっても、時間が経過すると歴史的な価値が加味され、映像文化財として新たな意義が生まれている。